

月刊 ウィーン

GEKKAN-WIEN

Monatsmagazin Japanisch

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙

創刊平成元年 創刊33年目 **Nr. 390**

2022年6月号



Mykhaylo Polinchak Ohne Titel, 2022 C-Print Im Besitz des Künstlers © Mykhaylo Palinchak

アルベルティーナ美術館『戦争の惨禍 ゴヤと現在 Die Schrecken des Kriegs. Goya und die Gegenwart』展より

杉本純の原子力の話II ウィーンと京都

123

東京電力福島第一原子力発電所で発生するALPS処理水（トリチウム以外の核種について環境放出の規制基準を満たす水）の安全性に関する報告書が四月二十九日、IAEA（国際原子力機関、本部はウィーン）より公表された。

日本政府とIAEAとの間で二〇二二年七月に行われたALPS処理水処分の支援に関する署名に基づき、IAEA職員及び一ヶ国の国際専門家より構成されるIAEAタスクフォースにより指定されたレビューチームが去る二月に来日した。

今回の報告書は、東京電力が二〇二一年二月に原子力規制委員会



2月のIAEAレビュー会合の様子
<https://www.jaif.or.jp/journal/japan/12895.html>

今回のIAEAによるレビュー報告書では「現実的に評価や説明の追加を求める」との指摘もあつたことから、萩生田光一経済産業相は二九日発表の談話の中で、「こうした指摘を東京電力の計画にしっかりと反映させ、ALPS処理水の処分に係る安全確保と国内外の理解醸成に引き続き取り組んでいく」としている。

さて、今月のウィーンと京都の対比では、両市出身の偉大な哲学者を紹介したい。一八三八年にオーストリア帝国モラヴィア州ヒルリッツに生まれたエルンスト・マツハは、ウィーン大学に入学し、物理学や生理学を学び、物理学で博士号を取得。グラーツ大学教授（数学、物理学担当）、プラハ大学教授（実験物理学担当）を経て、九五年にウィーン大学教授として招聘された。ウィーン大学では新設された「帰納的科学の歴史と理論」講座を担当。物理学では、静止流体中を運動する物体が音速を超えた場合、衝撃波が生じるこ

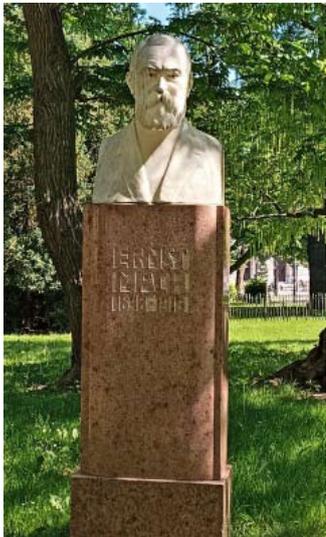
とを世界で初めて実験的に示した。この業績から、圧縮流体中における物体の速度と音速との比をマツハ数と呼ぶ。科学史・科学哲学の分野では、当時の物理学界を支配していた、ニュートンによる絶対時間、絶対空間などの基本概念には、形而上学的な要素が入り込んでいるとして批判。この考え方はアインシュタインに大きな影響を与え、特殊相対性理論の構築への道を開いたとされる。そして、物体の慣性力は、全宇宙に存在する他の物質との相互作用によって生じる、とのマツハの原理を提唱。この原理は一般相対性理論の構築に貢献することになった。認識論の分野では、直接的経験から再度、知識を構築しなおすべきだとする要素一元論を主張。当時、ニュートン流の粒子論的世界観を応用して理論を構築し、世界を實在論的な見方をしていたボルツマンやプランクらと論争を繰り広げた。マツハ哲学は、当時の若手の哲学者・科学者らに多大な影響を与え、ウィーン学団

結成のきっかけとなった。

一方、一八七〇年に加賀国河北郡森村に生まれた西田幾多郎は、石川県専門学校（後の四高）に学び哲学への関心が芽生えた。ここで古今東西の書籍に加え、外国語から漢籍までを学ぶ。東京帝国大学選科に入學

し本格的に哲学を学ぶ。大学選科修了後、故郷に戻り教職を得るが、学校内での内紛で失職するなど、在職校を点々とする。世俗的な苦悶からの脱出を求めていた西田幾多郎は、高校同級生である鈴木大拙の影響で、禅に打ち込むようになる。その後、第四高等学校教授、京都帝大助教などを経て、一九一三年に京都帝大教授に就任。三木清、西谷啓治など多くの哲学者を育てた。西田幾多郎の哲学体系は西田哲学と呼ばれる。郷里に近い国泰寺での参禅経験と近代哲学を基礎に、仏教思想、西洋哲学をより根本的な地点から融合させようとした。その思索は禅仏教の「無の境地」を哲学論理化した純粹経験論から、その純粹経験を自覚することによって自己発展していく自覚論、そして、その自覚など意識の存在する場としての場の論理論、最終的にその場が宗教的・道徳的に統合される絶対矛盾的自己同一論へと展開していった。西洋哲学の研究と参禅の産物である西田幾多郎の名著『善の研究』では、「善とは一言にていえば人格の実現である」との名言を述べている。四五年に文化勲章を受章している。京大時代、西田幾多郎が好んで散策して思案を巡らした琵琶湖疏水沿いの道は「哲学の道」と呼ばれ、日本の道百選にも選ばれている。

余談であるが、マツハ哲学がきっかけとなった相対性理論を学生時代にはよく勉強した。学生時代の下宿に近かった哲学の道は、観光客が多かったがよく散歩した。今月も両市に関連する偉大な哲学者を紹介することができた幸運に感謝しつつ、編集部撮影をお願いしたウィーン大学に隣接する市庁舎庭園にあるエルンスト・マツハの胸像の写真を掲載させていただく。



■ 杉本純

元京都大学教授
 元原子力機構ウィーン事務所長

杉本純の原子力の話II 「ウィーンと京都」の第1回からの全記事が次のサイトに掲載されています : <http://wattandedison.com/Sugimoto.html>

本誌執筆者の主な著作

- 河野純一著「不思議なウィーン」
- 河野純一著「ウィーン遺聞」
- 河野純一著「ウィーンのドイツ語」
- 河野純一著「横顔のウィーン」
- 須永恆雄訳「ウィーンの内部への旅」
- 須永恆雄編訳「マーラー全歌詞対訳集」
- 近藤常恭著「ウィーンの街の物語」
- 福田和代共訳「サフィア」

